

高齢者の心理的、精神的健康状態における孫の及ぼす影響 ～孫－祖父母関係評価尺度を用いた検討～

橋 本 翼

The effect of grandchildren in psychologic and mental health of elder person

Tsubasa HASHIMOTO

Abstract

The present study focuses on older person's psychological health and relationships with grandchildren, and attempts to clarify grandchild-grandparent relationships using a scale for objectively measurement of this relationship.

Structured interviews were conducted on older persons with grandchildren. Subjects were 77 individuals aged 65 or older who were visiting a Welfare Center for the Aged in Prefecture A, and who had a grandchild in junior high school, high school, or university. Interview data were analyzed by descriptive statistics, t-tests, Kruskal-Wallis tests, and Pearson's correlation coefficient using SPSS version 16.0 statistical software.

The analysis revealed a relationship between factors such as degree of depression and subjective health and 'succession promoting function' of grandchildren, and a relationship between factors such as interactions with a grandchild and psychological distance and 'time perspective promoting function' of grandchildren. In consideration of previous reports that indicated the importance of subjective health in successful aging, the present findings objectively demonstrate that the presence of a grandchild can help promote successful aging.

Key Words : psychological health, mental health, the relation between grandchild and grandparents

緒 言

1. 文献検討

現在の日本では、急速な高齢化が進み、高齢者が増加している。それと共に、高齢者の核家族化も進行している。全国の三世同居率をみても、平成元年では、14.2%、平成10年では11.5%、平成18年では9.1%と年々減少してきており、逆に

平成18年では高齢者のみの世帯が約半数（46.8%）となっている¹⁾。しかし、山形県は、三世同居率が全国1位（平成17年 山形：24.9%）で、2軒に1軒が高齢者のいる世帯（平成17年 全国：35.1% 山形：51.7%で全国1位）である²⁾。また、子供夫婦との同居の割合も全国平均（27.4%）に比べ、51.5%と高い割合を示している³⁾。子や孫と同居している高齢者は、別居してい

宮城大学 看護学部

〒981-3298 宮城県黒川郡大和町学苑 1-1

School of Nursing, Miyagi University

1-1 Gakuen, Taiwa-cho, Kurokawa-gun, Miyagi, 981-3298,

Japan

(受付日 2012. 1. 23, 受理日 2012. 3. 14)

る高齢者に比して、健康で情緒的に安定し、充実した生活を送っていることが知られていること⁴⁾から、山形県の高齢者は、元気で活力のある老後を送っているのではないかと考えられる。実際、筆者は祖父母と共に、三世代同居で暮らしてきたが、祖母は84歳を過ぎる現在でも健在であり、また、触れ合う機会の多い近所の高齢者の多くも、生き活きと暮らしている。高齢者に対する関心は、主として介護や疾病などのマイナスイメージばかりに集まりがちであるが、近年は、サクセスフル・エイジングという概念が注目されており、肉体的にも精神的にもいかに健康で過ごすかという事にも関心が向けられている。サクセスフル・エイジングとは、高齢者の理想的な老いとして考えられた概念で、多くの研究がなされてきている。特に、心理学、老年社会科学、高齢者看護学などの分野においては、このサクセスフル・エイジングに対する関心が高まってきている。サクセスフル・エイジングとは高齢期の自立と生きがいなどの主観的な側面を含む概念であり、その実現は高齢社会の究極の目標⁵⁾⁶⁾と言われているが、現在においても、概念として十分に確立されたものではない⁷⁾。嵯峨座⁸⁾や松本ら⁹⁾は、サクセスフル・エイジングの要件として、いくつかのカテゴリーをあげてはいるが、その報告は少なく、内容一つ一つに関して調査されている文献も少ない。現在のところサクセスフル・エイジングに関連する要件としては、主観的健康感（健康度自己評価）、主観的幸福感、生活満足度、抑うつ感の4点が挙げられており、主観的健康感（健康度自己評価）や主観的幸福感の関連が強いとされている⁸⁾⁹⁾。

前述のように、子や孫と同居している高齢者が、健康で生き活きとした生活を送っているという筆者の周囲の状況を考えると、子や孫と同居あるいはふれあいもサクセスフル・エイジングの一つの要件を構成するのではないかと推測される。事実、芳賀は、孫と高齢者の交流は、祖父母の生きがいとなり、主観的健康感を高める¹⁰⁾ことを示唆しており、サクセスフル・エイジングを送っているとされた高齢者は、統計的有意差は無いものの、子・孫との同居世帯において高い傾向にある⁷⁾と述べている。同様に、宮田と大川も、「特に孫の存在がサクセスフル・エイジングに大きな影

響を与えているのではないか¹¹⁾と述べている。エリクソンら¹²⁾によれば、「高齢者が孫と関わることは自己の生命が途絶えても、精神が次世代に引き継がれる信頼を形成し、そのことが死への不安を和らげる。多くの高齢者はどのくらいあるかわからない自分の未来への不安に対し、孫は『無限に未来に延びる自分自身の延長』となり気持ちの安定を取り戻す要因である」と述べている。このことから孫は、高齢者のサクセスフル・エイジングに影響を与えていると考えられている。しかし、具体的に孫-祖父母関係に着目し、どの要素が、サクセスフル・エイジングに影響を及ぼすかについて調査した研究は、これまでのところみられない。

今回、筆者は高齢者の心理的、精神的健康と孫との関係に着目し、具体的に孫のどのようなあり様が影響しているのかを、孫と祖父母との関係を客観的に測定できる尺度を用いて明らかにすることを試みた。本研究によって、サクセスフル・エイジングを達成する一つの具体的な要件が確立し、今後の高齢者をめぐる社会的、制度的な対応の一助となることが期待される。

2. 概念図

先行研究より、高齢者のサクセスフルエイジングに関係のある要因として、主観的健康感、主観的幸福感、生活満足度、抑うつ感が挙げられている。また、関連があると言われているものとして、孫の存在も挙げられているが、現在までのところサクセスフルエイジングに直接関連があると述べている論文はない状況である。そのため、本研究では、サクセスフルエイジングに及ぼす孫の存在と影響について調べることとした（図1）。

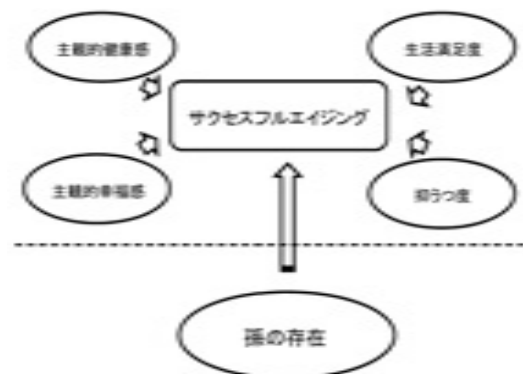


図1 高齢者のサクセスフルエイジングに及ぼす要因

研究方法と対象

1. 研究デザイン

孫を持つ高齢者を対象として、構成的面接法により下記に示すような調査項目についての回答を得て分析する。

2. 研究対象者

山形市内の老人福祉センターに通所する65歳以上の高齢者で、中学生、高校生または大学生の孫を持つ人77名である。本研究では、孫を持つ高齢者の特徴について先行研究と比較し考察したいと考え、孫を持つ高齢者のみに焦点を当てた。また、本研究で使用する孫－祖父母関係評価尺度は、中学生以上を対象とした尺度であるため、中学生、高校生または大学生の孫を持つ高齢者と規定した。

3. 調査期間

平成20年10月22日～11月30日とした。

4. 倫理的配慮

山形県立保健医療大学倫理審査委員会において、承認を受け（平成20年10月22日付）、各対象者には、研究の主旨を説明し、同意を得た。

5. 調査項目

- 1) 基本属性（年齢、性別、配偶者の有無、仕事の有無）
- 2) 孫と同居又は別居
- 3) 孫との連絡の取り方と付き合い方
- 4) 趣味、家庭での役割、生きがい
- 5) 高齢者抑うつ尺度（Geriatric Depression Scale :GDS）※
- 6) 主観的健康感（4段階評価）***
- 7) ビジュアルアナログスケールを用いた孫との主観的な“心の距離”
- 8) 孫－祖父母関係評価尺度〔祖父母版〕****

6. データ収集の手順

Y市の社会福祉協議会より介護老人保健施設2か所をご紹介頂き、調査を行った。ご紹介頂いた老人福祉センターを会場として調査を行い、時間は1時間程度で行った。

7. 分析方法

統計処理ソフト SPSS version 16.0 を使用し、記述統計、t 検定、Kruskal-Wallis 検定、Pearson の相関係数を用いて解析した。趣味、家庭での役割、生きがいについての項目では、それぞれをグループ化し分析を行った。

調査項目の説明

※ GDS:

イエサベージ¹³⁾が1983年に開発した高齢者抑うつ状態を測定する尺度で、オリジナルの質問項目は30問あるが、15問あるいは、5問の短縮版も用いられる。今回使用したGDSは、5問の短縮版であり、2002年に鳥羽ら¹⁴⁾がGDSの15項目とGDSの5項目には高い正の相関($r=0.9, p<0.001$)がみられることを示しており、信頼性、妥当性が認められている。得点化は、GDS問1に「いいえ」、GDS問2～5に「はい」と回答した場合に、1点を加算する方式であり、5点満点中2点以上は、うつ傾向を示すと判断される。質問項目は以下の5問である。

1. 毎日の生活に満足していますか
2. 毎日が退屈だと思ふことが多いですか
3. 外出したり何か新しいことをするよりも家にいたいと思ふますか
4. 生きていても仕方がないと思ふ気持ちになることがありますか
5. 自分が無力だと思ふことが多いですか

※※ 主観的健康感：

主観的健康観とは、現在の健康状態についての本人の評価のことで、健康度自己評価とも言われる。検査などによって客観的に測定することが困難な領域の健康度についての代替指標として使用する。「非常に健康」「まあ健康」「あまり健康でない」「健康でない」の4段階で評価。

※※※ 孫－祖父母関係評価尺度：

1996年に田畑治ら¹⁵⁾によって開発された孫と祖父母の関係を測定する尺度で、祖父母が回答する〔祖父母版〕と孫が回答する〔孫版〕がある。この尺度は孫と祖父母の日常的な行動的、情緒的関わりに加えて、孫が祖父母に与える影響（孫の機能）、祖父母が孫に及ぼす影響（祖父母の機能）をそれぞれ測定できる。

信頼性、妥当性については、〔祖父母版〕、〔孫版〕いずれも信頼性係数（クロンバックの α 係

数)は0.68~0.88であり,十分な信頼性は認められている。また各項目の因子分析(主成分分解,バリマックス回転)により,孫版は「存在受容機能」,「日常的・情緒的援助機能」,「時間的展望促進機能」,「世代継承性促進機能」の4因子,祖父母版は「時間的展望促進機能」,「道具的・情緒的援助機能」,「存在受容機能」,「世代継承性促進機能」,「日常的・情緒的援助機能」の5因子からなり,各因子の妥当性も認められている。

今回は,祖父母版のみを解析に用いた。祖父母版の下位項目については以下の通りである。

I. 時間的展望促進機能

「祖父母が孫の姿から余生の大切さを感じたり,過去の自分を振り返ったりすること」を意味しており,『自分の余生を振り返らせる度合』を表している。

II. 道具的・情緒的援助機能

「孫が祖父母の用事に付き添ったり,現在の流行を教えたりする等」を意味しており,『孫とのふれあいの度合』を表している。

III. 存在受容機能

「孫がいるだけで何もしなくても祖父母の心の拠り所になる」を意味しており,『存在が心の拠り所となる度合』を表している。

IV. 世代継承性促進機能

「祖父母が孫の姿を通して,先祖からのつながりや,自分の命が孫に引き継がれる実感を持つ」を意味しており,『世代が引き継がれていく安心感』を表している。

V. 日常的・情緒的援助機能

「孫が祖父母に関心や理解を示す」を意味しており,『日常の中での相互の関心の度合』を表している。

なお,この孫-祖父母関係評価尺度では,対象となる孫は,同居・別居に関わらず,一番関わりの多く親密度が高い孫1名を選択(可能な限り,中学生から大学生の年代を選択)し,○:2点,△:1点,×:0点として採点し,それぞれの項目で合算,得点化した。

結 果

1. 対象者の特性

男性27名(35.1%),女性50名(64.9%)であった。年齢の平均は76.6歳で,最低年齢は65歳,最高年齢は88歳であった。なお,配偶者は,48名(62.3%)が健在であった。職業は62名(80.5%)が無職,孫の平均人数は,4.41±2.05人であった(表1)。

表1 対象者の背景

項目	調査結果	
年齢	平均:76.6歳(最低:65歳,最高:88歳)	
性別	男性:女性	27(35.1%):50(64.9%)
配偶者の有無	有	48(62.3%)
	無	27(35.1%)
	無回答	2(2.6%)
職業の有無	有	14(18.2%)
	無	62(80.5%)
	無回答	1(1.3%)
孫の人数	4.41±2.05名	

N=77

趣味(複数回答)として,一番多く挙げられていたのは,音楽(22名)で,内容としては,カラオケがほとんどであった。次いで,教養・習い事(19名),農作業(14名),運動(11名)であった。

家庭での役割は,日常的な内容(48名)が最も多く,内訳として,家事や洗濯,掃除などが挙げられた。次いで,農作業(12名),家にかかわること(8名)であった。少数であるが,世話という回答もあり,その中には孫の世話が含まれていた。

生きがいについての調査では,趣味(33名)という回答が最も多く,次いで家族・孫との交流(12名),仕事(12名),家族以外との交流(9名),健康でいること(9名)であった(表2)。

表2 生きがい

生きがい	内容
趣味 (33)	囲碁・盆栽・釣り・踊り・カラオケ・音楽・コンサートに行く・テレビ観賞・土いじり・酒・タバコ・手芸・物づくり
家族との交流・孫との交流 (12)	楽しい食事・孫の成長・孫の存在・家族に迷惑をかけないこと
仕事 (12)	仕事のアドバイス・農業・乳牛の世話・畑の手入れ・家族のために働く事
家族以外との交流 (9)	友達との会話・小学生との交流・老人クラブ・デイサービスに行くこと・老人会・仕事のOB会
健康でいること (9)	温泉に行くこと・スポーツジム・太極拳
お茶のみ (3)	近所の人との時間の共有

複数回答

表3 主観的健康感

	人数 (%)
非常に健康だと思う	12 (15.6)
まあ健康な方だと思う	53 (68.8)
あまり健康でない	8 (10.4)
健康でない	1 (1.3)
無回答	3 (3.9)

N=77

表4 望む孫との付き合い方

	人数 (%)
いつも一緒に生活できるのが良い	37 (48.1)
ときどき会って食事や会話をするのが良い	32 (41.6)
たまに会話する程度で良い	7 (9.1)
まったく付き合いわずに生活するのが良い	0 (0)
無回答	1 (1.2)

N=77

表5 人との交流頻度

	3回/週 人数 (%)	1回/週 人数 (%)	2~3回/月 人数 (%)	1回/月 人数 (%)	全く無し 人数 (%)	非該当 人数 (%)	無回答 人数 (%)
同居している孫	41 (53.2)	1 (1.3)	2 (2.6)	1 (1.3)	3 (3.9)	15 (19.5)	14 (18.2)
別居している孫	14 (18.2)	9 (11.7)	8 (10.4)	23 (29.9)	6 (7.8)	6 (7.8)	11 (14.2)
別居している子供	19 (24.7)	9 (11.7)	15 (19.5)	19 (24.7)	3 (3.9)	3 (3.9)	9 (11.7)
親戚	16 (20.8)	6 (7.8)	14 (18.2)	24 (31.2)	3 (3.9)	※	14 (18.2)
友人	35 (45.5)	11 (14.3)	7 (9.1)	8 (10.4)	3 (3.9)	※	13 (16.9)
近隣の人	38 (49.4)	13 (16.9)	6 (7.8)	4 (5.2)	5 (6.5)	※	11 (14.3)

N=77

※回答する際に、親戚、友人、近隣の人各項目で、当てはまらない人はいないため非該当はなしとした。

主観的健康感については、「非常に健康だと思う」が12名(15.6%)、「まあ健康な方だと思う」が53名(68.8%)、「あまり健康でない」が8名(10.4%)、「健康でない」は1名(1.3%)であった(表3)。

望む孫との付き合い方に関しては、「いつも一緒に生活できるのが良い」が37名(48.1%)、「ときどき会って食事や会話をするのが良い」が32名(41.6%)、「たまに会話する程度でよい」が7名(9.1%)であり、「まったく付き合いわずに生活するのが良い」との回答はなかった(表4)。

交流頻度については、同居している孫では、一週間に3回以上交流を持っている人が41名(53.2%)で最も多く、別居している孫では、月1回程度の交流を持っている人が23名(29.9%)で最も多かった。全く無しという回答は6名(7.8%)で最も少なかった。また、別居している子供との交流では月1回程度の交流が最も多く19名(24.7%)であった。親戚との交流では、月1回程度が最も多く24名(31.2%)であった。友人・近隣の人との交流では、一週間に3回以上の交流が最も多く約半数を占めていた(表5)。

表 6 GDS の 5 項目の得点

配点	人数 (%)	総得点
0	46 (59.7)	0
1	14 (18.2)	14
2	7 (9.1)	14
3	3 (3.9)	9
4	1 (1.3)	4
5	0 (0)	0
無回答	6 (7.8)	※
平均	0.58±0.94	

N=77

※無回答の総得点は換算できないため記入せず。

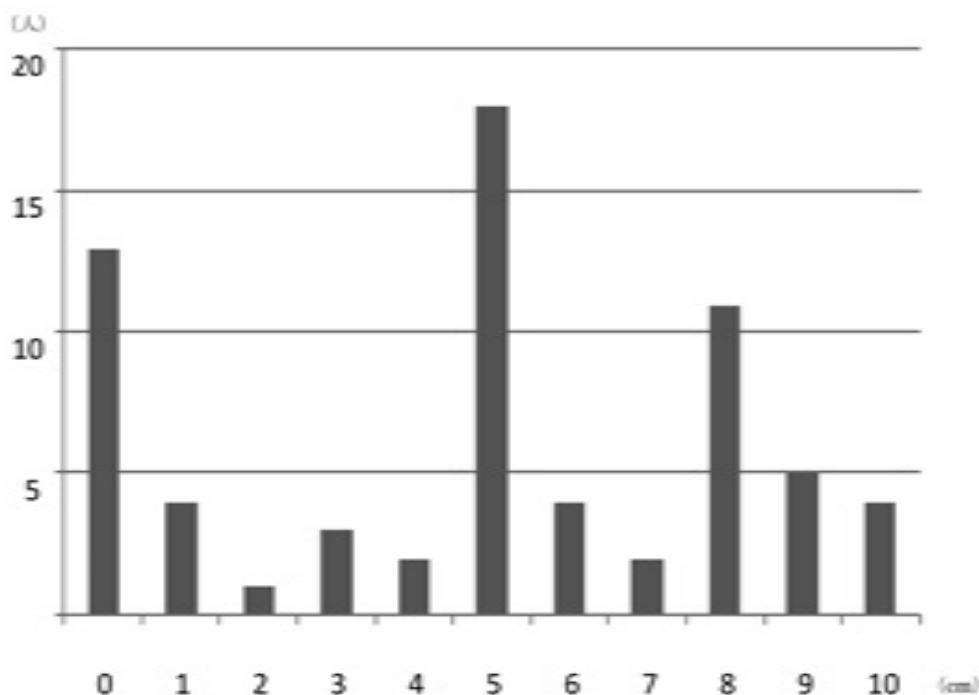


図 2 孫との主観的な“心の距離”の分布図

表 7 孫-祖父母関係評価尺度

下位尺度 (構成している質問数)	今回の調査結果 平均値±SD	得点/質問数
I. 時間的展望促進機能 (7)	12.31±2.21	1.76
II. 道具的・情緒的援助機能 (10)	14.01±6.10	1.40
III. 存在受容機能 (5)	7.30±2.71	1.46
IV. 世代継承性促進機能 (5)	8.31±2.30	1.66
V. 日常的・情緒的援助機能 (3)	4.77±1.72	1.59

GDS の 5 項目の平均得点は, 0.58 ± 0.94 点 (最小値: 0, 最大値: 4) であった (表 6)。

孫との主観的な“心の距離”については, 5 cm 前後と回答した人が最も多く, 次いで 0 cm 以上 1 cm 未満, 8 cm 以上 9 cm 未満であった (図 2)。

2. 孫-祖父母関係評価尺度を用いた解析

今回の調査において, この尺度の信頼性を示すクロンバックの α 係数は 0.77 であった。

各因子における平均得点は, 「I. 時間的展望促進機能」では 12.31 ± 2.21 点, 「II. 道具的・情緒的援助機能」は 14.01 ± 6.10 点, 「III. 存在受容機能」は 7.30 ± 2.71 点, 「IV. 世代継承性促進機能」は 8.31 ± 2.30 点, 「V. 日常的・情緒的援助機能」は 4.77 ± 1.72 点であった。また, 下位項目毎の得点の比較をするため, 1 問あたりの得点を算出した。その結果「時間的展望促進機能」と「世代継承性促進機能」の 2 つの下位項目において,

表 8 孫－祖父母関係評価尺度と主観的健康感との関係

	主観的健康感の項目	中央値 (範囲)	Kruskal-Wallis 検定
I. 時間的展望促進機能	非常に健康だと思う	13.4 (4.0)	
	まあ健康な方だと思う	13.0 (11.0)	
	あまり健康でない	12.0 (8.0)	
II. 道具的・情緒的援助機能	非常に健康だと思う	15.5 (31.0)	
	まあ健康な方だと思う	15.3 (20.0)	
	あまり健康でない	13.5 (16.0)	
III. 存在受容機能	非常に健康だと思う	8.4 (3.0)	
	まあ健康な方だと思う	7.8 (10.0)	
	あまり健康でない	6.5 (10.0)	
IV. 世代継承性促進機能	非常に健康だと思う	9.6 (3.0)	*]
	まあ健康な方だと思う	9.1 (10.0)	
	あまり健康でない	7.5 (10.0)	
V. 日常的・情緒的援助機能	非常に健康だと思う	5.8 (1.0)	
	まあ健康な方だと思う	5.2 (6.0)	
	あまり健康でない	4.8 (6.0)	

N=77

*:p<0.05

表 9 孫－祖父母関係評価尺度と孫の状況との関係

	孫の状況 (人数)	中央値 (範囲)	Kruskal-Wallis 検定
I. 時間的展望促進機能	中学生 (13)	13.0 (11.0)	
	高校生 (21)	13.1 (4.0)	
	大学生 (27)	12.5 (8.0)	
	その他 (12)	13.4 (5.0)	
II. 道具的・情緒的援助機能	中学生 (13)	11.7 (20.0)	
	高校生 (21)	15.0 (20.0)	
	大学生 (27)	15.0 (37.0)	
	その他 (12)	16.3 (9.0)	
III. 存在受容機能	中学生 (13)	6.0 (10.0)	* **]
	高校生 (21)	8.3 (6.0)	
	大学生 (27)	7.6 (10.0)	
	その他 (12)	9.25 (5.0)	
IV. 世代継承性促進機能	中学生 (13)	9.1 (10.0)	
	高校生 (21)	9.0 (5.0)	
	大学生 (27)	9.0 (10.0)	
	その他 (12)	9.25 (4.0)	
V. 日常的・情緒的援助機能	中学生 (13)	5.0 (6.0)	
	高校生 (21)	5.4 (6.0)	
	大学生 (27)	5.4 (6.0)	
	その他 (12)	5.4 (3.0)	

N=77

*:p<0.05 **:p<0.01

高い得点が得られた (表 7)。

孫－祖父母関係評価尺度の各下位項目と主観的健康感との関連については、Kruskal-Wallis 検定の結果、「IV. 世代継承性促進機能」(p=0.045) で有意に高かった (表 8)。

孫－祖父母関係評価尺度と配偶者の有無との関連については、t 検定を行ったが、有意差は見られ

なかった。

孫－祖父母関係評価尺度と孫の就学状況との関連については、Kruskal-Wallis 検定により、「III. 存在受容機能」の項目において中学生に比べ高校生の得点が有意に高かった (p=0.032)。同様に「III. 存在受容機能」において中学生に比べその他の得点が有意に高かった (p=0.007) (表 9)。

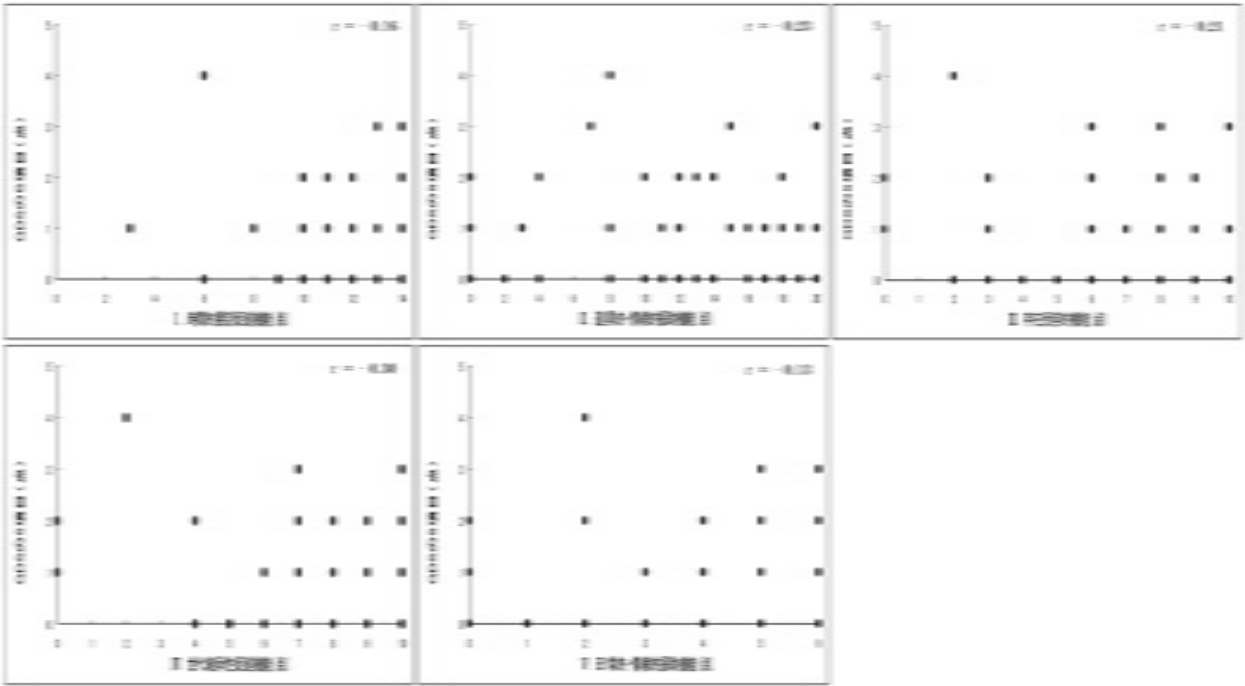


図3 孫-祖父母関係評価尺度とGDS 5項目との関連 (Pearsonの相関係数)

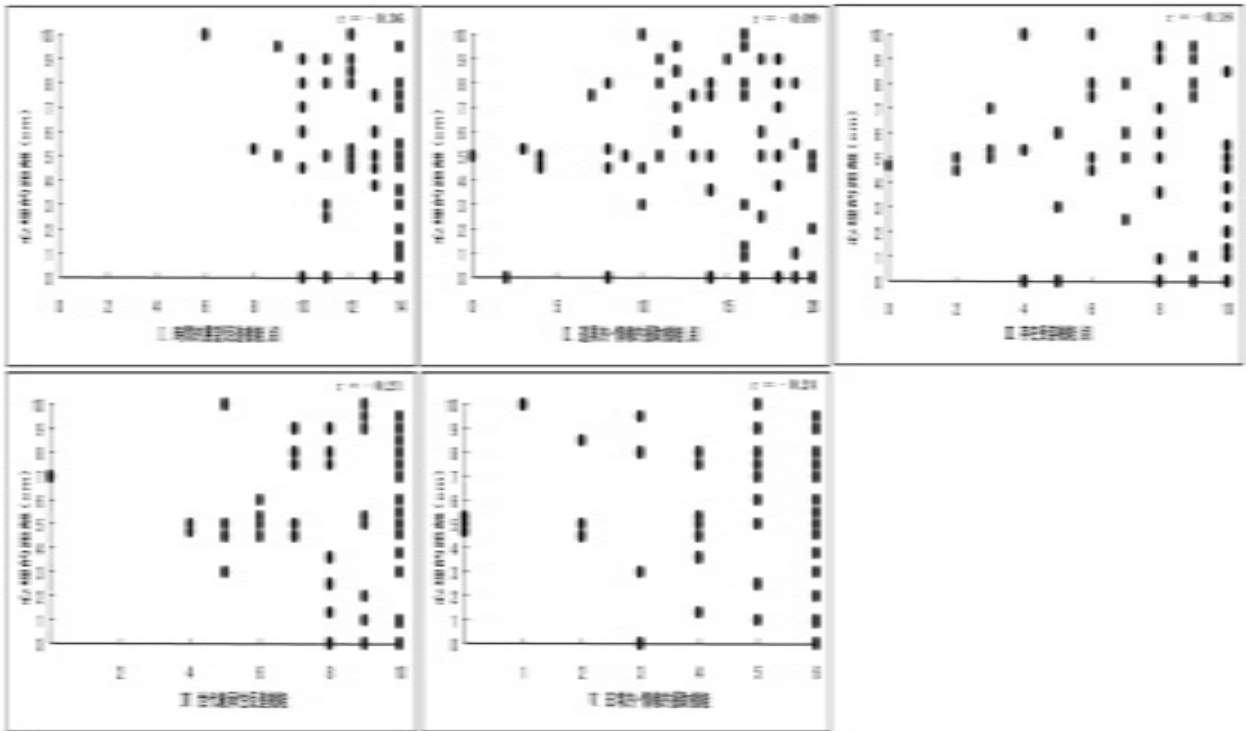


図4 孫-祖父母関係評価尺度と望む孫との主観的な“心の距離”との関係 (Pearsonの相関係数)

孫-祖父母関係評価尺度とGDSの5項目との関連については、Pearsonの相関係数より、「IV. 世代継承性促進機能」($r=-0.30$)と「II. 道具的・情緒的援助機能」($r=-0.23$)、「III. 存在受容機能」($r=-0.21$)に弱いながらも負の相関がみられた(図3)。

孫-祖父母関係評価尺度と望む孫との心理的距

離との関連については、「I. 時間的展望促進機能」($r=-0.36$)と「V. 日常的・情緒的援助機能」($r=-0.24$)、「IV. 世代継承性促進機能」($r=-0.21$)で弱いながらも負の相関がみられた(図4)。

考 察

1. 今回の対象集団の特徴

今回の調査対象においては、GDSを用いた解析で、抑うつ度の得点が低かったことは、抑うつ傾向ではないことを示している。鳥羽ら¹⁴⁾の調査は、対象者が杏林大学病院高齢医学診療科に入院もしくは物忘れ外来に受診した90例で、得点は 0.62 ± 0.73 であり、今回の調査での得点のほうが低かった。しかし、鳥羽らの対象者は入院もしくは外来通院している高齢者を対象としていたため、このような結果が得られたと考えられる。また、早川ら¹⁵⁾は、高齢者の運動能力に対して、「日常活動性が高い人ほど運動能力が優れていることが示唆された。さらに、6分間に歩くことができる最大距離(6MD)は、軽度ではあるがGDSとの相関がみられ、うつ傾向にある人ほど運動能力が低下していた」と述べており、GDSと身体的健康が相関していることを示唆している。よって今回の調査対象者は、身体的にも健康であると思われる。事実、今回の調査対象者が、主観的健康感においても健康であると感じている割合が高く、身体的にも、精神的にも健康な対象者であったと考えられる。

孫との付き合い方に関して、約9割が頻回に関係を持ちながら生活していきたいと答えている。全国調査¹⁷⁾と比較してその割合は多く、今回の対象者が居住する山形県においては、孫との関係性を大切にしていることが示唆された。山形では、三世同居率が高く、子や孫が比較的身近な存在として捉えられていることが、この結果に関連すると思われた。今回の調査で祖父母が孫との関係を維持したいと考えていることは、先行文献¹⁰⁾の結果から、祖父母自身の主観的健康感、主観的幸福感向上に孫の存在が影響しているものと考えられた。

交流の頻度については、同居の孫との交流において、一週間に3回以上交流を持っている人が5割で、別居の孫との交流でも、一週間に3回以上交流を持っている人が約2割(18.2%)であった。全国調査¹⁸⁾では、別居の孫では0.3%であり、山形県の特徴として、孫との交流の頻度が高いことを示している。このことは、別居であっても、孫が物理的に近い場所に居住していることが

多いことに起因していると思われる。実際、今回の聞き取り調査でも、同じ市内で生活している祖父母と孫が多数認められ、交流を持ちやすい環境にあることがわかった。

趣味として、音楽が一番多かった。高齢者の趣味として、歌やカラオケが選ばれていることは、内閣府の調査¹⁷⁾にも見られるが、それ程多い割合ではない。これは、今回調査させて頂いた通所施設において、毎日カラオケを行う時間があることによるものと考えられ、今回の対象者に特有のものと思われた。また、教養や習い事との回答もあり、今回の集団が身体的に自立した高齢者であり、時間の過ごし方が有意義な使い方につながっていることが考えられた。

家庭の中での役割という項目は、日常的な内容が多く述べられ、対象者は毎日の生活の中で全般にわたり家事に従事している。この結果は、高齢者が日中の家事を担当しており、子世代の手助けを行っていることによると考えられる。少数ではあったが、留守番、孫の世話、孫の弁当作りという回答もあり、共働き率が高い山形県²⁾においては、日中に孫と過ごす時間が多いと推測され、孫とのふれあいの時間も多いたことが予想される。

生きがいの構成要素に関する全国調査においては、趣味と孫¹⁷⁾という回答が最も多く、今回の調査における生きがいについては、趣味や孫との交流との回答が多かった。このことは、全国調査の結果と共通していた。

今回の調査集団においては、主観的健康感で健康であると答えた者が多かったことは、孫のいる高齢者を調査の対象としたためであると思われる。実際、中村ら¹⁹⁾は「孫のいる高齢者の方が、孫のいない高齢者よりも主観的健康感が高い結果を得ることが出来た」と述べている。さらに、孫と別居している場合でも、今回の調査対象者は、物理的に近い距離に居住しており、孫との交流の頻度が高く、そのことも主観的健康感に影響していたと考えられる。

2. 高齢者の心理的・精神的健康状態と孫との関連

今回の調査では、田畑らの開発した孫－祖父母関係評価尺度を用い、孫のどのような側面が、高齢者の心理的・精神的健康状態に影響を及ぼすか

を解析した。今回の調査での各下位項目の得点は、田畑らの報告¹⁰⁾と比較しいずれも高い値を示した。得点を質問数で割った1問あたりの平均得点を比較すると、田畑らの結果では、「Ⅰ. 時間的展望促進機能」が1.63点、「Ⅱ. 道具的・情緒的援助機能」が1.22点、「Ⅲ. 存在受容機能」が1.14点、「Ⅳ. 世代継承性促進機能」が1.66点、「Ⅴ. 日常的・情緒的援助機能」が1.33点で概ね同じ傾向を示した。

孫-祖父母関係評価尺度と抑うつ度との関係において、「Ⅳ. 世代継承性促進機能」、「Ⅱ. 道具的・情緒的援助機能」、「Ⅲ. 存在受容機能」について弱いながら負の相関がみられ、特に「Ⅳ. 世代継承性促進機能」で比較的高い相関係数が得られたことは、高齢者の精神的な健康状態と孫の「Ⅳ. 世代継承性促進機能」との間に関連があることが示唆された。これは、孫が次世代への血統や家風などの継承への期待感が高齢者の精神的な安寧に寄与していると考えられた。

孫-祖父母関係評価尺度と主観的健康感では、主観的健康感のうち「非常に健康」と答えた群と「あまり健康でない」と答えた群において、孫の「Ⅳ. 世代継承性促進機能」の影響に有意差がみられた。このことは、孫の持つ「Ⅳ. 世代継承性促進機能」は、祖父母の主観的健康感と強く関連していることを示している。高齢者において、孫が果たす機能は必ずしも一様ではなく、主体となる高齢者の健康感に依存しており、自分が健康だと思える高齢者ほど孫の影響を多く受け、健康でないと感じている高齢者は、孫から受ける影響も少ないと考えられた。また、芳賀ら⁷⁾は主観的健康感で健康であると感じている高齢者がサクセスフル・エイジングであると規定している。今回の対象者においても、主観的健康感で健康であると感じている高齢者が多く、先行研究⁷⁾からもサクセスフル・エイジングを達成している高齢者が多い集団であることが示唆され、高齢者のサクセスフル・エイジングと孫の持つ「Ⅳ. 世代継承性促進機能」に関して関連があることを示している。これは、未だはっきりと証明されていないサクセスフル・エイジングと孫との関係を示したもので、関連性を確認したことにつながるものと考えられる。同様に、「Ⅳ. 世代継承性促進機能」に有意差がみられたことは、エリクソンら¹²⁾が述べた、「高齢者

が孫と関わることは自己の生命が途絶えても、精神が次世代に引き継がれる信頼を形成し、そのことが死への不安を和らげる。多くの高齢者はどのくらいあるかわからない自分の未来への不安に対し、孫は『無限に未来に延びる自分自身の延長』となり気持ちの安定を取り戻す要因である」の内容と合致するものであり、孫の持つ多面的な機能の中でも、最も重要な機能であることを示している。

孫-祖父母関係評価尺度と配偶者の有無との関連では、孫のいずれの機能においても有意差はみられなかった。このことは高齢者における配偶者の有無と、孫との関係は、独立した項目であることが考えられる。

孫-祖父母関係評価尺度と孫の就学状況との関連では、「Ⅲ. 存在受容機能」の項目において中学生と高校生の得点と中学生とその他のそれぞれに有意差が見られた。これは、就学状況によって孫の存在が意識されることを示しており、孫の「Ⅲ. 存在受容機能」においては、孫の持つ社会的な立場が影響することを意味している。同時に中学生に対する得点よりも高校生、その他の孫に対する得点が優位に高いことから、年齢を重ね、成人に近くなるにつれ孫の存在が大きなものになっているものと考えられる。

孫-祖父母関係評価尺度と孫との主観的な“心の距離”では、「Ⅰ. 時間的展望促進機能」、「Ⅴ. 日常的・情緒的援助機能」、「Ⅳ. 世代継承性促進機能」で弱いながら負の相関がみられた。「Ⅰ. 時間的展望促進機能」において、比較的高い相関係数が得られたことは、孫との主観的な“心の距離”が近ければ近いほど、高齢者自らの余生や前途について考える機会が与えられることを意味している。

孫-祖父母関係評価尺度の中で、「Ⅱ. 道具的・情緒的援助機能」については、今回調査したいずれの項目とも関連性は見られなかった。このことは、孫の持つ「Ⅱ. 道具的・情緒的援助機能」は他者での代替が可能であり、特に孫である必要性が乏しいことに起因しているのではないかと考えられる。これは、地域や施設での他者との関わりが多い高齢者においては、そのような傾向が強いことが推測される。

結 論

1. 孫の存在は、高齢者の心理的・精神的健康状態に影響を与え、その中でも特に、「IV. 世代継承性促進機能」と「I. 時間的展望促進機能」に関連が認められた。
2. 孫の存在は、主観的健康感に影響を与え、ひいてはサクセスフル・エイジングの達成に寄与するものと考えられた。

謝 辞

本研究の趣旨をご理解頂き、調査項目が多いにも関わらず研究にご協力頂きました、対象者の皆様に深く御礼申し上げます。

あわせて、研究調査のため多大なお力添えを頂きました、社会福祉協議会の皆様方に心より感謝申し上げます。

また、論文作成に際し、御指導頂きました先生方に心より感謝いたします。

本稿は、山形県立保健医療大学大学院保健医療学研究科修士論文を加筆修正したものである。

文 献

- 1) 財団法人 厚生統計協会：国民衛生の動向・厚生 の指標 臨時増刊. 55(9)：37-42, 2008.
- 2) 山形県健康福祉部：山形県の健康と福祉：2007.
- 3) 全国社会福祉協議会：図説 高齢者白書 2005 年度版：2006.
- 4) 伊丹君和, 泊祐子, 浅野美礼：「祖父母－孫関係」にみた高齢者の QOL に関する研究 (1)－情緒に関するスコア (GDS) を用いて. 日本看護研究学会雑誌, 20(2)：89, 1998.
- 5) Rowe JW and Kahn RL: Successful aging. Gerontologist, 37:433-440, 1997.
- 6) Strawbridge WJ, Cohen RD, Shema SJ: Successful aging: Predictors and associated activities. Am J Epidemiol 144: 135-141, 柄沢明秀：高齢者の保健と医療. 早稲田大学出版部：1998.
- 7) 芳賀博, 島貫秀樹, 崎原盛造 ほか：地域在宅高齢者のサクセスフル・エイジングとその関

連要因. 民族衛生, 69(1)：13-18, 2002.

- 8) 嵯峨座晴夫：エイジングの人間科学. 学文社：1993.
- 9) 松本啓子, 若崎淳子：高齢者における Successful Aging の現状. 川崎医療福祉学会誌：67-72, 2006.
- 10) 芳賀博：長寿地域における高齢者のライフスタイルと健康 柗山幸志郎編 「長寿の要因－沖縄社会のライフスタイルと疾病－」. 九州大学出版会：10-17, 2000.
- 11) 宮田正子, 大川一郎：祖父母と孫の心理関係－孫と祖父母の視点から－. 高齢者のケアと行動科学, 11(1)：41-55, 2006.
- 12) エリクソン E. H, エリクソン J. M, キブニック H. Q：老年期－生き生きしたかわりあい (訳：朝長正徳, 朝長梨枝子). みすず書房：1990.
- 13) Yesavage JA: Development and validation of a geriatric depression screening scale. J Psychiat Res 17: 37, 1983.
- 14) 厚生科学研究所：高齢者総合的機能評価ガイドライン：107-114, 2003.
- 15) 田畑治, 星野和美, 佐藤朗子, 坪井さとみ, 橋本剛, 遠藤英俊：青年期における孫・祖父母関係評価尺度の作成. 心理学研究, 67(5)：375-381, 1996.
- 16) 早川公康, 田中繁宏, 宮本忠吉, 大島秀武, 弘原海剛, 沢田千栄, 松岡愛, 三村寛一, 前田如矢, 藤本繁夫：在宅高齢者の6分歩行テストによる運動能力と ADL および GDS との関連性と食事の検討. 日本体力医学会誌, 46(6)：854, 1997.
- 17) 内閣府：平成 20 年度版 高齢社会白書：21, 2008.
- 18) 旭化成ホームズ株式会社：ヘーベルハウスの「二世帯住宅研究所」. http://www.asahi-kasei.co.jp/hebel/nisetai/data/2005_sofubo/index.html: 1997.
- 19) 中村辰哉, 浜翔太郎, 後藤正幸：孫との関係に着目した高齢者の主観的幸福感に関する研究. 武蔵工業大学環境情報学部情報メディアセンタージャーナル, 8: 75-86, 2007.

要 旨

本研究は、高齢者の心理的、精神的健康と孫との関係に注目し、具体的にどのようなあり様が関係しているのかを、孫と祖父母との関係を客観的に測定できる尺度を用いて明らかにしようと試みたものである。

研究デザインは、孫を持つ高齢者を対象として行った構成的面接法である。山形市内の老人福祉センターに通所する 65 歳以上の高齢者で、中学生、高校生または大学生の孫を持つ人 77 名に調査を行った。分析には統計処理ソフト SPSS version 16.0 を使用し、記述統計、t 検定、Kruskal-Wallis 検定、Pearson の相関係数の解析を行った。

分析の結果、今回の調査対象者は、抑うつ度が低く、主観的健康感が高く、家庭では一定の役割を果たし、孫との交流が頻繁な、比較的自立した高齢者であった。その抑うつ度や主観的健康感は、孫の持つ「世代継承性促進機能」と関連していることが示された。また、孫との交流やその心理的距離と、孫の持つ「時間的展望促進機能」とが関係を有することも示された。いわゆるサクセスフル・エイジングに主観的健康感が重要であるというこれまでの報告などをふまえると、孫の存在はサクセスフル・エイジングの達成に寄与することが客観的に示され、特に「世代継承性促進機能」に大きな役割を果たすことが示された。

キーワード：心理的健康, 精神的健康, 孫-祖父母関係